〔研究ノート〕

# 北西太平洋岸先住民社会における先住民ツーリズムに関する研究ノート

## ――文化力の観光活用――

足　立　照　也

### はじめに

本稿は，筆者が2016年４月からカナダのブリティッシュコロンビア州において取り組む予定にしている「北西太平洋岸先住民社会における先住民ツーリズムの研究：文化力の観光活用」に備えるための研究ノートである[1)]。研究調査の目的は，先住民社会で取り組まれているツーリズムの実態を文化人類学的な視点から調査し分析することにある。特に先住民が継承してきた有形無形の文化を観光資源として活用することが，グラバーンが指摘するように（Graburn, 1976, p. 26），彼らのユニークな存在を外部世界に知らしめる有効な手段となっているかどうかを検証することである。また，先住民がツーリズム事業に関与することが持続可能なコミュニティの形成に貢献しているかどうかについても検証していく。こうした研究に備え，本稿では統計資料をもとにカナダ先住民の現状を包括的に把握するとともに，文化ツーリズムや先住民ツーリズムに関する先行研究を踏まえながらツーリズムが抱える問題点のいくつかを指摘したい。

### カナダ先住民とは

現在，カナダで先住民と呼ばれる人びとは，インディアン（Indian），メティス（Metis），イヌイット（Inuit）の３つに分類される[2)]。メティスとは，インディアンとヨーロッパの人びととの間に生まれた混血の人びと，イヌイットとはカナダ北極圏に暮らす人びとを指す[3)]。

従来，インディアンと呼ばれてきた人びとは，現在のカナダではファースト・ネーションズあるいはアボリジナル・ピープルと呼ばれている。彼らは，かつてインディアンという呼称のほかにネイティブ，ネイティブ・カナディアン，ネイティブ・アメリカン，アメリカン・インディアン，アメリンディアンなど多様な呼称で呼ばれてきた[4)]。しかし，これらの呼称のいくつかが否定的な意味を含んでいることや，インド人を意味する「インディアン」という用語が多民族国家カナダではインド系カナダ人との混同を生じさせることなどを理由に，それに代わる名称が求められた。インディアンという呼称に代わり，カナダでファースト・ネーションズという用語が一般的に使われるようになるのは1970年代のことである。1980年には，カナダ各地の酋長がオタワに集まり，ファースト・ネーションズ宣言[5)]を行い，また1982年には，先住民の文化や言語，教育，福利厚生などに関わる権利を守り，それを改善するために組織された全国インディアン協会がファースト・ネーションズ協会へと名称変更されている。

このファースト・ネーションズという用語は，カナダ建国の貢献者として，先住民をイギリス人やフランス人と同等の地位に押し上げる象徴的な意味を有している。また，多くの先住民コミュニティの自治を実現するため，自主決定や自己統治を追求していく政治的な意味も含まれている。

無断転載禁止

## 多文化主義とファースト・ネーションズ

ファースト・ネーションズという用語は3つのカナダ先住民のうちの1つを総称しているが，人びと自身は多数存在するネーションズのうちの特定のネーションあるいは特定のコミュニティの一員として自らを認識している。例えば，バンクーバー島にはワカシャン語族とコースト・セイリッシュ語族の2つの主要語族に属する人びとが暮らしており，44のネーションズが存在する[6)]。バンクーバー島ナナイモ市で出会った先住民の男性は，自らのことを対岸のベラベラからやって来たクワキウトゥルの一員だと名乗り，ナナイモ周辺に居住するセイリッシュの人びととは言葉も慣習も大きく異なることを力説していた。彼は，ナナイモの海岸通りを散策する観光客や地元住民を相手に木彫りを実践してみせながら，完成品を直販するのを生業としていた。言語学的にワカシャン語族に属するクワキウトゥルは，さらにクワクワラ，リックワラ，ナックワラ，タッタスックワラ，グッツサラなどの方言を用いるグループに分かれる。

ファースト・ネーションズという呼称がカナダ社会に浸透したことは，カナダが多文化主義政策を導入したことと関係している。1971年，カナダは世界に先駆けて多文化主義宣言[7)]を行い（Trudeau, 1971），1988年にはカナダ多文化主義法を制定した。この多文化主義宣言をきっかけに，カナダでは人びとの間に多様な文化集団の独自性を互いに尊重する価値観が共有されるようになるが，具体的な政策実行においては二つの考え方がみられる。一つは，人びとが多様なアイデンティティをもちながらカナダという単一の国家に帰属し，それを政治統合の基盤にするという考え方であり，もう一つは，カナダという国家内に一定の自治権をもつ複数の内的ネーションズの存在を認め，それぞれの独自性を維持しながらカナダ全体の統合を図ろうという考え方である（石川，2008，pp. 156–158）。前者は，多文化主義を唱えながらも政治的な同質化を求める傾向が強いのに対して，後者は，複数の内的ネーションズが政治的な自治権と文化的な多様性を維持することを前提としている。1970年代に入り，ファースト・ネーションズという呼称が一般的となるのは，一定の自治権をもつ複数の内的ネーションズが共存する国家形成を目指そうとする考え方に促された結果である。カナダ先住民関係・北方開発省（AANDC, 2015）によると，現在，カナダには60以上の文化集団あるいは言語集団を基盤とする617のファースト・ネーションズのコミュニティがあり，文化・社会・政治・経済面での復興を目指している。

英国がカナダ支配を確立していった18世紀中頃から，先住民は英国国王と条約を結び，それまで彼らが住んでいた土地の権利を国王に委譲するかわりに狩猟や漁撈の権利が保障されるようになる。1763年には国王宣言が公布され，インディアン居留地が設けられる。また，1876年には最初のインディアン法が制定され，居留地のインディアンを管理する権限が連邦政府に委ねられるようになった。同法はインディアンとして認定されるための諸条件を規定し，居留地外への移住を規制するとともに，居留地を単位とするバンド（band）を公的なインディアン組織として定める[8)]。その後，インディアン法は，不平等や不公平を取り除くべくいくつかの修正が加えられていくが，多くの条項は今も有効のままである。例えば，現在でも連邦政府が選挙を監督し，ファースト・ネーションズの法律の許認可権を握り，ファースト・ネーションズと個人に属する資金や資産を管理している。2011年統計によると，インディアン登記簿[9)]にインディアンとして登録されている人は64万人で，インディアン総人口の約74.9％を占める（Statistics Canada, 2011a, p. 7）。登録されると，連邦法によって一定の権利や特典，社会保障などが受けられるようになる。登録されたインディアンのうち約55％が居留地に住んでいるが，こうした居留地はカナダに2,200か所以上ある。辺鄙な場所にある居留地も多く，なかに

無断転載禁止

はほとんど人が住んでいない居留地もあれば，居住者のなかに非先住民が含まれているところもある。

現在，ファースト・ネーションズが目標としているのは，先住民の自治権を認めるよう憲法を改正することである。いくつかのファースト・ネーションズでは，土地や土地利用，資源，社会サービス，地方税などに関する管理権を認めるコミュニティ自治の取り決めを結んでいるところもあるが，このような取り決めを結ぶかどうかは個々のファースト・ネーションズの決定に委ねられている。

「1982年カナダ憲法」では，バンドが政府の行政単位として明確に位置づけられた。これによって，各居留地にバンド評議会が設置され，バンド成員の選挙によって選出された酋長と評議員がバンドに関する決定を行うようになる[10)]。また，1985年のインディアン法改正により，インディアンとしての登録も各バンド評議会が決定できるようになった（浅井，2004，p. 109）。

このように，連邦制を敷くカナダの政治体制のなかで，それぞれのファースト・ネーションズは徐々に自治権を行使できるようになり，住宅や電機，上下水道などのインフラストラクチャー整備，社会福祉プログラム，健康教育や保健サービスなども改善されつつある。また，先住民起業家が，政府や民間部門の支援を得て，不動産開発や観光，林業，鉱業などさまざまな部門で活躍するようになっている。しかし，全国の平均収入が29,878ドルなのに対し，居留地に居住する登録インディアンの平均収入は14,444ドル，幼児死亡率は全国平均が4.9％であるのに対し7.2％，失業率は非先住民の6.8％に対し14.9％と大きな差がある（Usalcas, 2010, p. 14）。そのため，社会的にも経済的にも改善すべき諸課題は依然として山積みのままである。こうした課題を解決するためには，ファースト・ネーションズのコミュニティが結束し，一つの大きな力になる必要がある。キムリッカが指摘するように（Kymlicka, 1998, p. 144），連邦制のカナダでは州内で多数派を占めることが連邦レベルでの自治権の獲得につながる。ところが，ファースト・ネーションズ居留地の75％が居住者数500人以下の小規模なコミュニティであり，しかも，こうした小規模のコミュニティが国内各地に散らばっている現状では互いに連携をとるのが難しい。500人以下のコミュニティが52％に達するブリティッシュコロンビア州の実情を，ウィスラーのオーデイン美術博物館でマーケティング・マネージャーを務めているサラ・ベインブリッジ氏に尋ねてみた。彼女の返答は，言語や文化が同じコミュニティへの帰属意識は強いものの，それらが異なるネーションズとの隔たりは大きく，互いに連携を図って結束することが難しいとのことであった。連邦レベルの意思決定に参画するためにはファースト・ネーションズ間の結束が不可欠といえる。

## 先住民人口と年齢構成

2011年の統計資料を参照し，カナダ先住民の人口をみてみよう。カナダの総人口3,348万人に対し，先住民人口は140万人で，総人口の約4.2％を占める（Statistics Canada, 2011a, p. 7）。その内訳は，ファースト・ネーションズが85万人，メティスが45万人，イヌイットが5.9万人となっている。1996年から2006年までの10年間の人口増加率をみると，カナダ総人口の増加率が9％であるのに対し，先住民人口は45％増と高い伸び率を示している（Ibid., 2006, p. 10）。この人口増加の要因は，先住民の間にみられる高い出生率と，近年，自らを先住民として登録する人の割合が増える傾向にあるためである。連邦国家カナダは10の州と3つの準州から構成されているが，先住民人口が最も多いのがカナダ中東部に位置するオンタリオ州（30万人）で，次に西部に位置するブリティッシュコロンビア州（23万人），中央平原に位置するアルバータ州（22万人），マニトバ州（19万人），サスカチュワン州（16万人）となっている。ただし，先住民が占める人口比率が高いのは，北極圏に近

いヌナブト準州（86.3％）やノースウエスト準州（51.9％）である（Ibid., 2011a, p. 9）。近年は都市部に暮らす先住民も増えている。2006年の統計によると，先住民の54％が大都市圏や地方の中小都市に居住しており，このうちファースト・ネーションズが50％，メティスが43％，イヌイットが3％となっている（Ibid., 2006, p. 12）。

先住民の年齢構成を非先住民と比較すると，先住民人口は非先住民よりかなり若い層から構成されている。その指標として年齢中央値をみると，非先住民が40歳であるのに対し，先住民は27歳と若い（Ibid., 2006, p. 14）。また，24歳以下の若年層が占める割合は，先住民が48％であるのに対し，非先住民は31％である。特に若い人たちの割合が高いのは都市部である。このように先住民人口に占める若年層の割合が高い要因は，出生率が高い割に平均寿命が短いためである[11)]。

先住民社会に顕著にみられる特徴の一つは，若年出産の割合が高い点と，片親によって養育される子どもが多い点である。15歳から19歳の女性が子どもを産む割合は，非先住民が1.3％であるのに対し，先住民女性は8％と高い（O'Donnell and Wallace, 2011, p. 20）。社会・経済的にもジェンダーの面でも不利な立場にある先住民の女性が若くして母親になることは，さまざまな問題を抱え込むことになる。教育を受ける機会を失ったり，雇用面で不利な状況におかれたり，シングルマザーとなる可能性が高まったり，自立できずに生活支援が必要になったりと，多くのリスクを負うことになる。10代で子どもを出産した25歳から29歳のファースト・ネーションズの女性のうち，20％が9学年の教育を修了していない（Guimond and Robitaille, 2008, p. 50）。また，10代の母親から産まれる子どもも，誕生の瞬間から厳しい環境に直面する。母親が出産前に適切な指導やケアを受けていないため，未熟児や胎児性アルコール中毒と診断される乳児が増えている。さらに，家庭内でのネグレクトや幼児虐待のため，家族から引き離されて社会福祉局の保護管理下におかれるケースも増えている。10代の母親の80％が年収15,000ドル（約150万円）以下の家庭で育っており，経済的な不安定さが子どもたちの健康不調を増幅させている。先住民社会で多くみられる若年出産は，子どもたちが身体的，情緒的，知的，精神的に健やかに成長できる健全な環境を提供しているとはいえない。しかも，非先住民の女性と比較して先住民の女性は一人で子どもを養育する割合が高い。単独で子どもを育てている15歳以上の女性を比較すると，非先住民が8.3％であるのに対して先住民は18％と高い割合を示している（O'Donnell and Wallace, 2011, p. 19）。

## 教育事情

カナダの教育は州政府の管轄下にあり，各州の教育省が教育水準を設定し，それぞれ地域の特色を活かしたカリキュラムを組んでいる。12年間の初等・中等教育が義務教育期間にあたり，6・7歳から15・16歳までの児童・生徒が就学している。州によって多少の違いがあるが，例えばブリティッシュコロンビア州では，1学年から7学年までをプライマリー・スクール，8学年から12学年までをセカンダリー・スクールと呼んでいる。この期間が日本の小・中・高等学校教育に該当する。その後の高等教育をポストセカンダリーと呼ぶが，大学やカレッジ，コミュニティカレッジ，職業訓練学校などでの就学がこれにあたる[12)]。

以下，統計資料を参照し，先住民の教育事情を概観しておこう。25歳から64歳の年齢層を対象に，高等教育機関への進学歴をみると，48.4％が専門学校やコミュニティカレッジ，大学などに進んでいる。その内訳は，職業訓練学校の修了証書を有する者が14.4％，カレッジのディプロマを有する者が20.6％，大学の修了証書あるいはディプロマを有する者が3.5％となっている（Statistics Canada, 2011b, p. 4）。これを非先住民と比較すると，高等教育を受ける非先住民は64.1％と高く，そのうち12.1％が職

無断転載禁止

業訓練学校の修了書を，21.3％がカレッジの修了書を，4.9％が大学の非学位コースの修了書を，25.9％が学位を取得している（Ibid., p. 5）。先住民と非先住民との間で大きな差がみられるのは大学への進学率と学位取得率である。また，高等教育を受けてもコースやプログラムを修了せず，資格取得証明や修了書，ディプロマの取得に至らない者が28.9％もいるのも非先住民と大きく異なる点である（非先住民は12.1％）。

次に35歳から44歳までの比較的若い層と55歳から64歳までの年齢層に分け，高等学校の卒業率を比較すると，前者が68.0％なのに対して後者は58.7％となっており，若い年齢層ほど高い教育を修了していることがわかる（Ibid., p. 5）。ちなみに，非先住民の場合，前者が88.7％，後者が79.5％となっており，ファースト・ネーションズとの大きな差がみられる。また性別で比較してみると，35歳から44歳の年齢層にある男性の大学卒業率が7.6％であるに対して女性は13.6％，55歳から64歳の年齢層では男性が7.6％に対して女性は10.2％と，女性のほうが教育を受けることに積極的である（Ibid., p. 5）。

「インディアン教育はインディアンの手で」を目標に，今日，多くのファースト・ネーションズがコミュニティ内の教育プログラムを管理するようになった。その結果，就学率が向上し，脱落者の割合も減り，大学やカレッジ，専門学校などで高等教育を受ける学生も増えている。そうした学生は，商業，経営管理，エンジニアリング，応用科学，貿易といったコースで現代の職業ニーズに合った教育を受けている。また，カナダ政府も彼らの雇用環境を改善するため，公共サービス部門や民間企業で働く先住民の昇進を奨励するプログラムを実施している。しかし，非先住民の教育状況と比べると，改善すべき点は山積している。

## 言語事情

今日，先住民文化がコミュニティの誇りとして再評価されつつある。彼らの文化や言語，歴史に関する教科が教育課程に取り入れられるとともに，先住民の習俗や信仰，言語，伝承などを継承していくためのセンターも各地に設立されている。2015年夏，筆者が視察したチェアカマス・センターもその一つである。当センターは，1969年，青少年の野外学習や環境学習プログラムを提供する施設として，ノース・バンクーバー教育委員会のもとに設立された。約420エーカーの環境保護区を活用して実践的な環境教育を提供するとともに，センター内に再建されたスコーミッシュの伝統家屋を利用して先住民文化を体験できるプログラムを提供している。訪問者は，インタープリターの語りを通して自然とのつき合い方や薬草に関する知識，シーダー材やサーモンの重要性，ドラムの音色や歌の意味，口頭伝承などスコーミッシュの人びとの文化を包括的に学ぶと同時に，薬草や料理作りを通して彼らの暮らしを実体験することができる。こうした活動は，訪問者がファースト・ネーションズへの理解を深めるだけでなく，ファースト・ネーションズの人びとが自らの文化を再認識し，次の世代に継承していく手段となっている。

今日，カナダでは12の語族に属する60以上の先住民言語が使用され，先住民の放送局や新聞が彼らの言語で番組や情報を提供している。言語は彼らのアイデンティティと密接に関わるだけに，その使用は個人やコミュニティの健全性を保つ基盤となる。しかし，かつて実行された同化政策や近年のグローバル化によって，先住民言語は消滅の危機にさらされ続けてきた。今後も彼らの言語が持続的に使用されるかどうかは，言語集団の人口規模や世代間の継承力，話者人口と平均年齢，言語に対するコミュニティ成員の意識，話者の居住環境など，さまざまな要因に左右される。

統計資料を参照し，先住民の言語情況をみてみよう。子どもの頃に学習した言葉を母語[13]として認識している先住民の数は21万人である。これを言語集団別にみると，アルゴンキン語族

のクリー語が８万人，オジブワ語が1.9万人，イヌイット語族のイヌクティトゥット語が3.4万人，アサパスカ語族のデネ語が1.2万人となっている（Statistics Canada, 2011c, p. 2）。ブリティッシュコロンビア州の状況をみると，セイリッシュ語族で2,950人，ツィムシアン語族で1,815人，ワカシャン語族で1,040人が各言語を母語と認識している（Ibid., p. 3）。さらに，自宅で母語を使用する先住民は全体で82.2％あり，そのうちの58.1％は日常的な使用，24.1％は定期的な使用となっている（Ibid., p. 4）。

特定の先住民言語を母語と考える人の数と，それを日常言語として使用する人の割合は必ずしも比例していない。例えば，クリー語を母語と考える人は先住民言語のなかで最も多いが，それを日常言語として用いている人の割合は82.2％に留まっている。これに対して，アティカメク語を母語と考える人は5,915人と少ないものの，97.2％の人が日常言語として使用している（Ibid., p. 5）。母語の日常使用は人びとの居住環境と関係しており，地方の居留地やコミュニティになるほど使用率が高くなる。ファースト・ネーションズを例にとると，居留地に暮らす登録インディアンの44.7％が母語を使って会話ができるが，居留地外で暮らす登録インディアンの場合は14.1％と低くなる（Langlois and Turner, 2014, p. 4）。

ところで，先住民言語で会話ができる人のうち，その言語を母語と考える人が78.3％であるのに対し，21.7％の人は英語やフランス語など異なる言語を母語と認識している。これは，先住民の言葉を第二言語として捉えている（あるいは学んでいる）人がいることを示している。その割合は，メティスが35.3％と最も高く，ファースト・ネーションズが23.1％，イヌイットが10.2％となっている（Ibid., 2014, p. 6）。また，先住民言語を自分の母語と認識している人のうち，6.9％の人が理解はできても話すことができなくなっている。

多様な先住民言語を存続させるため，子どもの教育に責任を持とうとする親たちが協力してバンドスクールを設立し，自分たちの文化や言語を学ぶための教育が実践されている。連邦政府や州政府もこうした取り組みを支援しているが，その進展は緩慢である。その要因として話者人口の少なさ，学校不足などが挙げられるが，それ以上に先住民言語を習得し使うことの社会経済的価値が低いことが大きな妨げとなっている（Norris, 2011, pp. 21-23）。例えば，ノースウェスト準州では，英語とフランス語のほかに９つの先住民言語が公用語として認められ，いずれの言語も法廷や議会で使用できるが，法律条文は英語とフランス語で表記されたものだけが法的価値を有している。

ここまで，カナダ先住民の現状について統計資料をもとに概観してきたが，次に先住民社会で取り組まれている文化ツーリズムあるいは先住民ツーリズムの考察に移ろう。

## 文化の捉え方

「文化なくして観光はない」（UNWTO, 1995, p. 6）とまでいわれるほど，観光と文化は密接な関係を有している。しかし，レイモンド・ウィリアムズが文化という用語ほど複雑で厄介な概念はないと指摘しているように（Williams, 1983, p. 87），文化という語彙の多様な捉え方や用法が混乱を生じさせている。文化遺産の管理者は文化を保護され保存されるべき貴重で価値のある資源として捉えるだろうし，アート・マネージャーは演者や鑑賞者の生活を豊かにする刺激的なパフォーマンスとして捉えるかもしれない。また，博物館員は専門的な研究対象となる貴重な収集物として文化を捉えるだろうし，観光産業の従事者は多くの人が取りつきやすく楽しんでもらえる資源として捉えがちである。文化人類学では，文化を特定の社会の人びとによって習得され，共有され，次の世代に伝達される外面的および内面的な生活様式の体系として捉えることが多い。また，小規模な社会を参与観察という手法を用いて調査してきた文化人類学者は，どれほど小規模な文化で

無断転載禁止

あっても固有の価値と尊厳を有しており，文化に優劣はないとする文化相対主義の考え方を多かれ少なかれ共有している（Steward, 1948, p. 351; Benedict, 1959, p. 3; Geertz, 1984, p. 263; Edgerton, 1999, pp. 55–57）。

文化に優劣がなく，文化の多様性を認めようとする考え方は，例えば，文化財や文化遺産を歴史的・芸術的・学術的に高い価値を有するものとみなす考え方とは相反する。特に世界文化遺産の登録においては人類共通の財産としての普遍的価値が求められ，文化に優劣がつけられる。しかも，口頭伝承や社会慣習，芸能のようにうつろいやすく消滅しやすい無形文化は対象とならないため，アフリカやオセアニアなど多くの無形文化を継承してきた社会では世界文化遺産の登録数が少ない。このような偏りを是正するための取り組みが，2003年の第32回ユネスコ総会で採択され，2006年4月に発効した「無形文化遺産の保護に関する条約（無形文化遺産保護条約）」である[14]。ただし，この条約は世界遺産条約の無形文化版では決してない。卓越した普遍的価値を遺産リスト登録の評価基準に設定する世界遺産条約とは異なり，無形文化遺産は相互に同価値であることを前提としている。そのため「世界」という冠はつけず，単に無形文化遺産と称し，その保護を通して多様性を確保することを目的としている。また，文化は地域共同体の生活に根ざすものとの認識から，共同体や集団によって幾世代にもわたって伝えられ，担われてきたものを無形文化遺産保護条約の対象としている。

このように文化をどのように捉えるかによって，あるいは個々の文化とどのように関わるかによって，文化の解釈は異なり，その活用法も異なる。卓越した文化的価値を評価基準とする世界遺産条約と，相互に同価値であることを前提とする無形文化遺産保護条約。音楽・文学・絵画・彫刻・演劇など芸術に代表されるハイカルチャーを文化とみなす用法と，人びとの暮らしに根ざした生活様式を文化とみなす文化人類学的な用法。文化を商品化し消費財として提供しようとする試みと，消滅や変容の危機にさらされている文化財を保護し保存していこうとする試み。現代という時代は，さまざまな立場にある人たちが，文化とさまざまな関わり方をしている。ここで重要なのは，そうした動きを対立的で排他的なものとして捉えるのではなく，現代社会において相互に関係し合いながら多様な文化を生成する動態的な関係として捉える視点である（山下，2007，pp. 53–54）。

ジェームズ・クリフォードは，近代における文化と美術の動態的な関係を考察し，未開や大衆社会から集められた収集物が，美術品として評価されたり，文化財として価値づけられたりしながら流通し，変化を遂げていく現象を分析している（クリフォード，2003，pp. 283–286）。彼は，縦軸に真正と非真正を，横軸に傑作と器物を対比させ，そこにできる4つの象限を，①真正の傑作，②真正の器物，③非真正の傑作，④非真正の器物の意味領域として設定する。ここで重要なのは，古いものも新しいものも，珍しいものもありふれたものも，馴染みがあるものもエキゾチックなものも，いずれか一つの象限に分類されるが，それらは決して帰属する象限に固定されるわけではなく，各象限の間を移行する点である。例えば，冬の儀礼で使われたクワキュートルの仮面が北西沿岸先住民を代表するアートとみなされるようになり，民族誌的文化（第2象限）から美しい芸術（第1象限）へと移行する。あるいは，ツーリストの土産物であったオーストラリア先住民の工芸品や絵画が，ニューヨークで開催されたドリーム展を機にエキゾチックな芸術作品として評価され，ツーリスト・アート（第4象限）が芸術（第1象限）あるいは先住民を象徴する文化（第2象限）へと移行する。つまり，人びとの暮らしに根ざす生活文化と高い価値を持つ芸術作品，観光の場で商品化される文化と美術館に展示される絵画などは対立関係にあるのではなく，現代社会の多様な文化生成過程に関与するなかで，それぞれの意味づけや解釈が行われることによってダイナミックに変化していくのである。

文化を特定の人びとや社会集団によって共有される生活様式として捉えながらも，歴史的に積み上げられてきたものとしても優れて現代的なものとしても，有形のものとしても無形のものとしても，政治的なものとしても象徴的なものとしても，またグローバルなものとしてもローカルなものとしても，商品化されるものとしても日々の生活の実践としても捉えていく多角的な視野を持つことが重要である。そうでなければ，文化という用語が人間の生活と結びついたあらゆる活動を指して使われるようになったポストモダン社会あるいはグローバル社会において，文化を説明することが困難となってしまう。また，フットボール文化，アニメ文化，カフェ文化，食文化，ポップカルチャー，ハイカルチャーといったように文化という用語に修飾語をつけて使われることが多くなった近年の現象を理解することもできない。

## 文化ツーリズムとは

グローバル産業として飛躍的な成長を遂げつつある今日のツーリズムは，世界最大の多国籍経済活動（Freidman, 1995, p. 76）であり，世界の83％の国々においてトップ5にランキングされる輸出産業（Fayed and Fletcher, 2002, p. 208）となっている。また，モノやサービス，人の移動と関わるツーリズムは，現在のグローバル現象を目にみえるかたちで顕在化させている。気候変動や燃料費の高騰，頻発するテロリズムなど否定的な事象が各地で起きているにも関わらず，ツーリストの数は増え続けている。こうした経済的な重要性と同様に，ツーリズムは文化的な重要性も増幅させている（Wood, 1997, p. 1）。それは，多くのツーリストが地球の隅々まで出かけるようになり，ツーリズムが人びとの気づきや経験のモードとして機能するようになったからである。ツーリストのまなざしは，人びとの社会生活のあらゆる側面に影響を与え，グローバルな文化にとってもローカルな文化にとっても無視できないものになりつつある。ツーリズム産業の成長にともなって旅行形態も多様化しており，その一つに，ある種の文化的他者と出会い，交流や経験を通して気づきを生みだす文化ツーリズムがある。

文化ツーリズムを特徴づけるものが何かについては，さまざまな研究者が多様な定義を提唱している。文化を人びとの生活様式として包括的に捉えると，あらゆるツーリズムは文化的要素を含んでいることになる（Robinson and Smith, 2006, pp. 1–2; Richards, 2007, p. 14）。このような漠然とした捉え方がある一方で，多くの研究者が，文化ツーリズムの特徴を文化的他者や彼らの生活様式を学ぶことにみいだしている（Nash, 1981, p. 462; Ryan, 1991, p. 5; Wood, 1997, p. 18）。これは，人を旅へと掻きたてる好奇心が，文化的他者や彼らの文化を知りたいという欲求から生まれてくることを根拠としている。また，他者理解が結果的に自己理解につながることを文化ツーリズムのもう一つの特徴とみなす定義もあれば（Selwyn, 1996, p. 21），新たな情報に触れたり，新たな体験を通して自己実現を達成し，人の心を豊かにする旅と捉える定義もある（Adams, 1995, p. 33）。さらに，文化ツーリズムの具体的な側面に注目し，博物館や文化遺跡，伝承や祭り，絵画・彫刻・工芸・演劇・音楽・舞踊などの芸術表現など特定の文化的魅力に惹かれて人びとが日常生活の場から移動することと捉える定義もあれば（Richards, 1996, p. 24），文化資源の開発やマーケティングなどビジネス面に注目し，文化ツーリズムの重要性を指摘する定義もある（McKercher and Du Cros, 2002, p. 21）。こうしたさまざまな先行研究を要約すると，文化ツーリズムとは，文化的他者の生き様を知りたいと望む人間の欲求を商業ベースで実現させる観光形態ということになろう。それは，オーセンティックな状況下で文化的他者を「観たい」というツーリストの要求を満たすことを基本としており，芸術作品や工芸品，音楽，文学，舞踊，食べ物や飲み物，言葉，演劇，祭りなどさまざまな文化要素によって表現される文化的他者の生活を実際に観て体験す

無断転載禁止

るツーリズムである。

ところで，文化ツーリズムにおいて消費される文化資源は，過去の遺産だけでなく，現代の文化や人びとの生活様式，宗教や信仰なども対象となる。そのため文化ツーリズムには，過去の遺跡を巡るヘリテージ・ツーリズムも含まれれば，現代の創作であるさまざまな芸術表現を対象とするアート・ツーリズムも含まれる（Richards, 2001, p. 7）。しかも，こうした文化資源は単に「観る」対象として消費されるだけでなく，絵画や工芸，写真，舞踊，料理などの技術や技法を学ぶために実際に体験し創作する機会も提供している。その意味で，ツーリストが何かを創作するクリエイティブ・ツーリズムも文化ツーリズムの一つといえる。このほかに，歴史的な都市を訪れたり，ウォーターフロントを楽しんだりする都市文化を対象とするツーリズム，ワイナリーを楽しんだり，農業を体験するなど田園地帯を対象とするツーリズム，先住民文化を対象とするツーリズム，テーマパークやコンサート，スポーツイベントなどに参加する体験型の文化ツーリズムなどが挙げられる（Smith, 2009, p. 18）。つまり，ツーリストが，時に受け身の姿勢で，時に主体的に，時に双方向的な関係のなかで異文化や文化的他者と関わりながら，新たなことを学び，創作し，楽しむことができるのが文化ツーリズムだといえる。

## エスニック・ツーリズム

次に文化ツーリズムの一形態として捉えることができるエスニック・ツーリズムについて検討しておこう。エスニック・ツーリズムは，しばしばエキゾチックな民族集団の文化に触れ，人びとと交流することを目的とする旅と定義され，‘ethnic’，‘indigenous’，‘aboriginal’，‘native’，‘tribal’などの用語をつけて呼ばれる。文化ツーリズムとの違いは必ずしも明確ではないが，エスニック・ツーリズムの場合，特定の集団にみいだされるエキゾチズムがツーリストの関心を惹きつける大きな要素となっている。そのため，対象が先住民や原住民と呼ばれる人びとの文化に限定されることが多い[15]。また，エキゾチックな装いをした「人」そのものもツーリストのまなざしの対象となるため，彼らは裏舞台でサービスを提供するだけでなく，表舞台に登場することになる。さらに，ツーリストの暮らしと社会経済的に大きくかけ離れた生活をしている人びととの出会いを特徴としていることから，両者の隔たりを調整する第三者が介入するケースが多くみられる。そのことが，エスニック・ツーリズムをより大きなツーリズム産業の枠組みに組み込んでいく要因となっている。

ところで，原住民ツーリズム（indigenous tourism）とエスニック・ツーリズムを厳密に区別する場合もある（Smith, 2009, p. 101; Hinch and Butler, 2007, p. 12）。この場合，原住民ツーリズムという用語は，遠く離れた辺境の地で暮らす部族集団の生活様式や伝統的な習俗を体験する旅を指して用いられる。これに対し，エスニック・ツーリズムは，ツーリストと同じ社会に暮らす少数派集団の文化活動を対象とし，少数民族や移民，ディアスポラ集団などが創りだす文化やアートが対象となる（Shaw, 2007, p. 50; Maitland, 2007, p115.）。近年は，大都市の一画に居住するディアスポラ集団や少数民族が創りだすエキゾチックな景観が魅力となり，作り物でないオーセンティックな経験ができる区域としてツーリストを集めるようになっている。両者を区別する視点からファースト・ネーションズの事例をみてみると，どちらのケースもみることができる。バンクーバー発祥の地と伝えられるガスタウンの一画は，多くの観光客を集める名所となっているが，先住民アートを集めたギャラリーが数軒あり，エスニック・ツーリズムを体感できる。また，ハイダ・グワイにある集落を訪ねると，ハイダの伝統的な工芸技術を学んだり，アーティストのギャラリーを楽しめる原住民ツーリズムを体験することができる。

## BC州における先住民ツーリズム

ブリティッシュコロンビア州の経済において，ツーリズム部門は州の財源や雇用確保の面で重要な位置を占めている。製造業や林業，農業，鉱業，石油・天然ガス採掘などと比べても，近年，安定した成長を遂げているのはツーリズムである。2013年の統計をみると，ツーリズム部門で13万2,200人（前年比3.0％増）を雇用し，139億ドルの収益（前年比3.7％増）をあげている。また，2003年からの10年間で雇用者数は12.2％，収益は44.3％の伸びを示している（BC Stats, 2014, p. 2）。ブリティッシュコロンビア州政府が作成したツーリズム戦略によると，今後，年５％の成長を目標とし，2015年に172億ドル，2016年に180億ドルの収益を見込んでいる（Ministry of Jobs, 2014, p. 16）。

カナダ政府およびブリティッシュコロンビア州政府は，ツーリズムが先住民社会の経済を成長させる牽引車となり，彼らの自立を促す有効な手段になると喧伝してきた（Csargo, 1988, p. 23; Hinch, 1995, p. 116）。それは，現代社会において今なお保持されている彼らの「他者性」が好奇心旺盛な旅行者の関心を惹きつけ，先住民に可能な資本投資で雇用拡大と収益が見込めると期待されたからである。また，先住民がツーリズムのような文化産業に従事することによって文化の再生と継承が可能となり，カナダの多様性にもう一つの魅力を加えることになると考えられたからでもある（Sisco and Nelson, 2008, p. 9）。連邦政府や州政府は，今後の先住民政策において居住環境や教育，雇用問題の改善など多くの課題を抱えている。そうした課題を解決するための行動計画の一つが先住民ツーリズムの促進である。

初期の頃の先住民ツーリズムは，第三者である仲介者が事業を管理運営し，先住民文化を魅力ある「未開」文化の一つとして呈示していた。したがって，先住民コミュニティに直接利益をもたらすことはほとんどなかった。また，先住民ツーリズムに参加するツーリストの多くは，高齢で教養のある外国人であり，ヨーロッパ人が先住民に対して抱いているお決まりの捉え方を再確認する旅，つまりエキゾチックで伝統的な生活様式を今も保持しながら暮らす人びととの出会いを目的としていた。また彼らが求めたものは，先住民を単なるエンターテイメントの一つとして眺めるのではなく，オーセンティックな雰囲気のなかで楽器演奏やダンスに興じることができる体験型のツーリズムであった（Williams and Stewart, 1997, p. 29）。1980年代の先住民とツーリズムの関係を考察したV.ブランデルは，ツーリストが，先住民の日常生活の場を訪れることは稀だが，踊りの集会であるパウワウ（powwow）など先住民が上演する文化的パフォーマンスに参加する者が年々増えていることを指摘している（Blundell, 1989, p. 49）。また，先住民アートや工芸品が博物館で展示され，ギャラリーや土産物店でも販売されるようになり，多くのツーリストが先住民文化に触れる機会が出現した。しかし，そうした土産物のなかには，非先住民が先住民の表現様式を模倣したり先住民イメージを機械的に模写して大量生産した安価な工芸品や装身具が含まれている。大量生産された廉価な土産物は，消費者の期待を裏切るだけでなく，知的財産権の侵害でもある。その対策として，カナダでは先住民の作品であることを証明する「なめし革のビーバー」を描いたタグを美術品や工芸品に付けて販売するようになった。ブリティッシュコロンビア州においても，BCインディアン・アート＆クラフト組合が，制作者の名前や出自，製作日，作品概要などを記した値札を付け，先住民の手作り品であることを示すようになった（Duffer, 1983, p. 99）。しかし，廉価な土産物は今も随所で販売されている。2015年夏，筆者がバンクーバーやナナイモ市内にあるツーリスト用ギフトショップで調べたところ，大量生産された模造品や模写品が多く出回り，それらの多くが海外で製造されたものであった。これに対し，先住民アートギャラリーや博物館附属のギフトショップで販売されている美術品や工芸品

無断転載禁止

には制作者の名前と出自が明示され，それらがオーセンティックなものであることを裏づけていた。この土産物にまつわる騒動は，自らの文化を守ろうという先住民運動に発展するとともに，事業を先住民が管理運営する動きへと進展していく（Blundell, 1993, p. 65）。カナダ先住民ツーリズム協会会長のB. パーカーは，1993年，先住民に関する王立委員会の公聴会の場で，ツーリズムの発展が先住民に利益をもたらすとすれば，それは適切な訓練を受けた先住民の手によってツーリズム事業が管理運営されるようになったときのことだと主張している（Parker, 1993, p. 402）。

萌芽期の先住民ツーリズムは，事業の多くが多数派社会に所属する部外者によって管理運営され，先住民の関与は散発的かつ小規模で，間接的であった。また，ツーリストに提供される先住民文化も，まがい物がまかり通るのが常態であった。これまで支配的な社会からおざなりにされ周縁に追いやられてきた先住民だが，そうした扱いはツーリズム部門においても同様であった。先住民文化は，しばしば主流社会の目的を達成するために不当に扱われ，都合のいいように利用されてきた。その典型例が，ほとんど関心が払われてこなかった先住民文化がカナダという国家のシンボルとして利用されるようになったことである。グローバル競争が激しくなり，他国との差別化を図る必要性に迫られたとき，カナダの独自性として先住民文化を全面に打ち出す国家戦略がとられたのである（Notzke, 2006, p. 23）。先住民のイメージは美化され，彼らのアートや工芸品，あるいは先住民の姿を描いた図柄がカナダの魅力を内外に宣伝する媒体物として用いられるようになる。しかし，それは，N. グラバーンが指摘するように国家が先住民から借用した「借りもののアイデンティティ」であり（Graburn, 1976, pp. 27–29），ツーリストを誘致するために先住民イメージを国家シンボルとして戦略的に利用したものにほかならない。

1990年代に入ると，先住民がツーリズム事業に直接関与する環境が整うようになる。その牽引役を担ったのが，1992年，ツーリズム事業に携わる先住民やコミュニティのために人材育成プログラムや情報などを提供し，先住民の社会経済状況を改善する目的で設立されたカナダ先住民ツーリズム協会（ATAC）であり，その後，各州に設立されていく同様の協会である。ちなみにブリティッシュコロンビア州では，1996年にBC州先住民ツーリズム協会（AtBC）が設立されている。これ以降，ATACやAtBCなどが連邦政府や州政府と連携し，先住民ツーリズム事業を促進するための戦略や行動計画を作成し，それを実行していくことになる。例えばブリティッシュコロンビア州では，サービス部門で働くために必要な知識やスキルを習得できる人材育成プログラムや，事業展開に不可欠な資源活用法やマーケティングが学べる教育プログラムを提供している（UNIES, 1995）。また，AtBCとブリティッシュコロンビア州政府のもとで2005年に作成された「先住民文化ツーリズム設計戦略」では，ツーリズムのもつ潜在的な可能性を高く評価し，マーケティングやプロモーションに投資する行動計画が示され，実行に移されている（AtBC, 2005）。その結果，2010年には先住民ツーリズムの事業者数が200を超え，雇用が32％増えるとともに，先住民ツーリズムに参加したツーリストの数が370万人に達した。また，彼らが消費した額は4,000万ドルにのぼっている（The BC Jobs Plan, 2012, p. 25）。

先住民がツーリズム構想の決定に関与し，自分たちの方法で開発を進める機会が増大するにつれ，先住民社会に広まっていたツーリズムに対する否定的な感情も薄まっていく（Piner and Paradis, 2004, p. 83）。先住民によるツーリズム事業が成功するかどうかは，彼ら自身がツーリズムをどのように捉えているかにかかっているが，初期段階で彼らが味わったのは，部外者による過小評価や失業による無力感，そして自分たちの伝統が汚されてしまったことによる失望感などであった。また，部外者に利益が搾取されている実態が明らかにされると，ツーリズム

開発が自分たちの土地と資源を守る有効な手段になると主張する人びとの罠にはめられたと感じる先住民が増大する。しかし，最近はそうした否定的な見解に変化の兆しがみられ，自分たちが積極的に取り組んでいくだけの価値ある事業としてツーリズムを捉えるようになってきた。また，そのための能力開発に挑戦する人びとの数も増えている。こうした先住民ツーリズムにみられる最近の動向は，多くの研究者も肯定的に評価している。ツーリズム事業に携わることによって先住民の間に市場経済への関心や知識が高まり，若者の雇用拡大につながった（Colton and Harris, 2007, p. 228）との指摘や，自らの文化に対する捉え方が一新され，人びとが誇りをもって文化を学び直す機会が増大した（Butler and Menzies, 2007, p. 21; Nepal, 2004, p. 175）といった指摘がみられる。

## 持続可能なツーリズムの開発

ツーリズム事業において持続可能な開発は避けて通れない課題である。特に狩猟採集を主な生業としてきた北西太平洋岸先住民にとって，彼らの暮らしを取りまく環境保全は，自らの文化を保護し継承することでもある。環境と文化の保存を求める声が高まるなか，自然と文化に焦点をあてた先住民ツーリズムは持続可能な開発を目指すための有効な手段となり，その実現が持続可能な先住民コミュニティの形成につながると考えられるようになる（AtBC, 2005, p. 1; Nepal, 2004, p. 174）。

国連の世界観光機関や環境計画などの協力のもとに設立されたグローバル・サスティナブル・ツーリズム協議会は，長期的な持続可能性を確保するためには環境面，経済面，社会・文化面の 3 つの領域において適切なバランスを構築する必要があると指摘している（GSTC, 2013, p. 2）。ところが，これまでの研究の多くは，自然環境や経済面における持続可能性に焦点をあて，社会・文化的側面の考察を疎かにしてきた。アイデンティティや帰属意識，習俗，信仰，世界観など社会・文化的な側面は，それぞれの文化の違いを際立たせるものだけに先住民ツーリズムの開発において特に注目する必要がある。というのも，それらは人びとの日常生活を構成する生きた文化要素であると同時に，ツーリストが体験する先住民文化の一部を成しているからである。そのため社会・文化的な持続性が担保されてこそ，オーセンティックなツーリズム体験をツーリストに提供することが可能となる。しかし，社会・文化的な持続性を担保しながら先住民ツーリズムの開発を進められるかどうかは，人びとの文化的アイデンティティの強弱に依存する（Robinson, 1999, p. 380）。人びとのアイデンティティが希薄になったコミュニティでは社会・文化的な持続性も脆弱となり，先住民ツーリズムの中核をなす文化力が失われてしまう。そのため，先住民ツーリズム事業を展開することすら困難となる。集団への帰属意識が，「同じ」という実感を成員が共有するとともに，他集団との「違い」を認識することによって強く意識される（Isajiw, 1974, p. 113）ことを考えると，ツーリストのまなざしが先住民に与える影響はプラスとマイナスの両面において大きい。両者の交流が相互理解につながり，先住民ツーリズムの価値が高められ，ある程度の収益が見込めるようになったとき，先住民ツーリズムは持続可能な事業として展開することが可能となる（Li, 2000, p. 129）。

ところで，先住民がツーリズム事業に関与していく過程で直面するのは，自分たちの手で事業体を管理運営していくために必要な能力開発の問題である（McIntosh, 2004, p. 3; Ryan and Huyton, 2000, p. 55）。これまで政府が行ってきた先住民ツーリズム事業への支援策は，人びとの能力向上を目指すよりも，優良な事業体を支えることに重点がおかれていた。また，政府の支援を受けるには複雑な企画書や申請書の提出が求められ，そうした手続きに不慣れな先住民を起業家として育てビジネスを成功に導くのを妨げてきた。政府機関や銀行が要求する官僚的で複雑な手続きに悩まされ，意気消沈した先住

無断転載禁止

民コミュニティや起業家たちはツーリズム事業に参画することを途中で放棄してしまうことが多かった（Bennett and Gordon, 2007, p. 342）。

こうした状況のなかで注目されているのが，先住民コミュニティにおけるキャパシティ・ディベロップメント（capacity development）の手法である。キャパシティ・ディベロップメントとは，個人や集団，組織，社会が持続可能な視点をもって開発目標を設定し，それを達成する能力を向上させるプロセスのことをいう（UNDP, 2009, p. 4）。能力開発における従来の考え方と大きく異なるのは，開発プロセスの中心に自立性や持続性を位置づけ，自助努力や自立的発展を重視している点である。また，個人や集団，組織，社会の各レベルを視野に入れた包括的な視点を持ち，相互の関わり合いに配慮しながら問題対処能力を習得することが重視されている。それは個人や組織，社会が自分たちのために行う内発的なプロセスであり，このプロセスを通して先住民起業家がツーリズム事業を成功に導く確信をもつようになることが重要である（Bennett and Gordon, 2007, p. 344）。例えば，ファースト・ネーションズの若者たちは，伝統的な生活様式である狩猟採集や漁撈に馴染んでいるが，ツーリズム事業には不慣れである。しかし，森のなかを案内しながら彼らが継承してきた狩猟採集や漁撈の知識・技術を伝える訓練をすることによって，優秀なガイドやインタープリターが育っている（Nepal, 2004, p. 63）。これまでの能力開発プログラムの多くは西欧モデルを基本としてきたが，先住民にとって馴染みのある学習法を導入することも大切である。

## 文化呈示とオーセンティシティ

先住民によるツーリズム事業が持続可能性を獲得するには，オーセンティックな文化をどれだけ呈示できるかが重要な条件の一つとなる。オーセンティシティの捉え方はツーリスト，旅行業者，文化の呈示者，コミュニティ成員など，ツーリズムとの関わり方によってそれぞれ異なる。先住民ツーリズム・マーケティング・サークルが，オーセンティックな先住民ツーリズムを認定するために５つの条件を示している。それらは，①先住民が事業に関与し，事業体を所有していること，②伝統的かつ慣例となっている先住民の技能や方法が用いられていること，③地域の習俗や文化が正確に表現されていること，④地域のコミュニティが関与していること，⑤自然環境や文化が尊崇の念をもって扱われていること，となっている（ATMC, 2013, p. 7）。

ツーリズムにおける文化呈示の方法は，文化をどう解釈するかに大きな影響を与える。マーケティング資料に用いられるお決まりの先住民イメージは過去の姿を写しだしたものが多く，そのイメージが今も正しいものとしてツーリストに信じ込ませてしまう（McIntosh, 2004, p. 4）。これと同様に，土産物に描かれた先住民の図柄もお決まりのもので，そうしたイメージを定着させるのに一役買っている。こうした決まりきったイメージは，先住民の姿を正しく描写していないばかりか，現代の先住民社会にみられる多様性や先住民ツーリズムの多様な形態を反映していない（Schmiechen and Boyle, 2007, p. 54; Williams and O'Neil, 2007, p. 46; Nepal, 2004, p. 182; Ryan and Huyton, 2002, p. 633）。もちろん，先住民の過去の姿を描き呈示することに意味がないわけではない。カナダという国家が形成される過程で翻弄されてきた彼らの歴史を正しく伝えることも，先住民ツーリズムの重要な役割の一つである。彼らが辿ってきた足跡を展示することは，文化的な呈示を通して政治的な緊張を緩和し，好ましい関係を導きだすことにもなる。また，闘争の真相を展示することによって，彼らが受けてきた抑圧の深刻さを非先住民に気づかせることにもなる（Hinch and Bulter, 2007, p. 10）。ツーリズムという場を借りて先住民と非先住民の交流が進むことは，両者の相互理解を一層促進させることにつながる（McIntosh, 2004, p. 11）。

先住民文化を呈示するうえで重要なことは，過去の姿と現代の姿のバランスを取り，その両面を伝えることができる巧みな表現法を考案することである。ツーリストはエキゾチックでお決まりのインディアンの姿にまなざしを向けたがる。そのため，彼らが思い描くイメージを再現して呈示するような演出が先住民ツーリズムの場においてみられる（Mclintosh, 2004, p. 13; Robinson, 1999, p. 13）。しかし，真に求められるのは，先住民の過去と現代が正しく伝わり，ツーリストの理解が深まる文化呈示の方法である（Li, 2000, p. 129）。オーストラリア，シドニーの先住民ツーリズムに注目したヒクソンは，遠く離れた辺境の地でもなく博物館でもない大都市シドニーの街中で先住民と交流することが，ツーリストに「先住民オーストラリア」の生きた文化を理解させる結果につながったと指摘している（Hinkson, 2003, p. 301）。先住民の文化力に焦点をあてたツーリズムへの関心が高まるなか，都市という設定のなかで現代の先住民や彼らの歴史を包括的に呈示する多様な経験モードが求められている。

## おわりに

北西太平洋岸先住民社会における先住民ツーリズムの研究は緒に就いたばかりで，さらに掘り下げていく必要がある。また，現地で行う調査研究に備えるためにも，さらなる研鑽が必要である。ここでは現地調査を実施するうえで特に注目すべき6つの考察点を明示し，本研究ノートの締めくくりとする。それらの考察点とは，先住民社会におけるツーリズム事業が，①文化資源の保存と継承に貢献しているか，②新たな文化の生成がみられるか，③文化の正確な解釈がされているか，④先住民のアイデンティティ確立につながっているか，⑤オーセンティックな文化呈示となっているか，⑥収益が持続可能なコミュニティづくりに貢献しているかの6点である。

## 注

1）阪南大学国外研究制度により，2016年4月から1年間，カナダのブリティッシュコロンビア州において研究調査に従事する予定である。また，2015年8月には約3週間，国外研修制度を利用して現地調査を実施することができた。このような機会を与えてくださった関係者各位に心よりお礼申し上げる。

2）イギリスの法的従属から解放され，完全な独立国家となった1982年，新たにカナダ憲法が制定され，その第35条2項に，先住民とは，「カナダのインディアン，イヌイット及びメティスをいう」と定義されている（国立国会図書館調査及び立法考査局，2012年，p. 78）。ところで，ファースト・ネーションズという呼称が一般的になったとはいえ，この呼称を法的に明文化したものはない。1985年に改正されたインディアン法においても，また1982年カナダ憲法においてもインディアンという名称が使われている。

3）メティスは，フランス語で「混血」のことであり，厳密には平原地帯に住むクリーの女性とフランス人毛皮商人との間に生まれた混血児，あるいは北部に住むデネの女性とイギリス人やスコットランド人商人との間に生まれた混血児を指した。今日では広くファースト・ネーションズの人びととヨーロッパ人との間に生まれた混血の人びとを指し，自らをインディアンやイヌイットと異なるメティスとして認識している人びとのことをいう。なお，先住民を入植者よりも先に居住していた人びとを指すとすれば，先住民とヨーロッパ人との混血であるメティスの人びとは先住民でないことになる。この点に関してさまざまな解釈や議論があることを付記しておく（守谷賢輔，2012，p. 584）。イヌイットは，イヌクティトゥット語を話す人びとの自称であり，「人」を意味するイヌックの複数形である。彼らは，かつてヨーロッパ人探検家からエスキモーと呼ばれたが，インディアン言語の一つであるアルゴンキン語で「生肉を食べる人」を意味することから，今のカナダでは使われていない。ただし，イムピアットとユピックの先住民が暮らすアメリカ合衆国アラスカ州では，前者がイヌイットと同じ文化集団に属するものの後者は異なるため，彼らを総称してエスキモーと呼んでいる。

4）こうした呼称は，主に非先住民がファースト・ネーションズを指して用いる他称だが，自称としてインディアンが用いられる場合もある。アメリカン・インディアンという呼称は，北米大陸全域にわたって居住する先住民を指すのか，それともアメリカ合衆国内に住む先住民を指すのか曖昧なため，カナダ国内ではカナダ・インディアンと呼ぶことがあった。

無断転載禁止

5）宣言の具体的内容は次の8項目である。①我々は創造主がこの地に遣わした最初の民である。②創造主は，自然と人間が調和を保って生きていくため，あらゆる関係を調節する掟をもたらした。③この創造主の掟は，我々の権利と責任を明確にしている。④創造主は，精神的な信仰，言葉，文化，そして我々に必要な恵みを与えてくれる母なる大地を与えた。⑤我々は，遠い昔から自由と言葉，伝統を維持してきた。⑥我々が遣わされたこの土地のために，今後も創造主が与えてくれた権利を行使し，責任と義務を果たしていく。⑦創造主は，我々が自らを統治する権利と自己決定する権利を与えた。⑧創造主が我々に与えた権利と責任は，ほかのネーションによって変更されることも奪われることもない。

6）ブリティッシュコロンビア州には先住民が使用する言語の約60％が集中しており，203のファースト・ネーションズのコミュニティが存在する。

7）宣言には，次の4つの目的が明記された。①各文化集団が自らのアイデンティティを維持し，育むことを支援する。②各文化集団がカナダ社会にしっかりと参画できるよう，障壁を取り除く支援をする。③あらゆる文化集団間の創造的な交流を促進する。④新たに移住する人びとがカナダの公用語のうち少なくとも一つの言語を習得するのを支援する。

8）言語と文化を共有する集団をトライブ（tribe）というが，この用語は主にアメリカ合衆国で使用されている。カナダでは血縁関係を核とする集団を指して用いられるが，この集団が狩猟や漁撈のための移動集団となったときにバンドと呼ばれた。バンドは，特定の地域や集落に本拠地を持っていたことから，土地名がバンド名となっている集団もある（Duff, 1997）。

9）ファースト・ネーションズの人びとは，インディアン登録簿にインディアンとして登録された人たち（Registered Indians/Status Indians）と，自らをインディアンと認識しながらも登録されていない人たち（Non-Registered/Non-Status Indians）に分類される。

10）今日では，バンドに代わってファースト・ネーションズの名称を用いるコミュニティが多くなっている。酋長やバンド評議員は2年あるいは3年ごとの選挙で選出され，上下水道や学校，道路などの整備，教育向上などの諸課題解決にあたっている。また，利害関係を共にするいくつかのバンドが，資金管理や生活向上のために組織したのがトライバル評議会である。地理的・政治的・文化的・言語的な共通性を有するバンドから組織される（AANDC, 2002, band, band council, tribe, tribal councilの欄を参照）。

11）1960年代と比較すると，ファースト・ネーションズの女性の出生率は6.1人から2.7人にまで減少しているが，カナダ女性全体の出生率に比べると高い出生率である。平均寿命は，カナダ全体で男性が77.0歳，女性が82.2歳なのに対し，先住民は男性が70.9歳，女性が76.8歳と短い。

12）高等教育機関には，学位取得を目的とする大学，非学位コースや大学進学のための単位取得コースを提供するコミュニティカレッジ，技術・職業訓練を提供する専門学校などがある。また大学においても，正規の学位コース以外に，人びとの要望に応えるための非学位コースを提供しており，こうしたプログラムを受講すると，修了証明書やディプロマが授与される。

13）カナダの人口統計では，子どもの頃に最初に学んだ言葉で，今も理解できる言葉を母語と定義し，自宅で日常的あるいは定期的に使われる言葉を家庭言語と定義している。

14）世界遺産委員会議長やユネスコ事務局長を務めた松浦晃一郎は，欧州の文化保護の発想と米国の自然保護の発想が融合して生まれた世界遺産の評価基準が欧米中心に偏っていることから，それを打開するために無形文化遺産保護条約が成立するに至った経緯を語っている（朝日新聞朝刊，2008年9月3日）。無形文化財保護条約成立に至るまでの経過については佐藤直子や星野紘の著作に詳しい。

15）原住民（indigenous people）という用語は，近代国家や国境が形成される前から特定の土地に居住し，支配者集団との関わりにおいて顕著に異なる社会・文化的アイデンティティや習俗を共有する人びとの集団を指して用いられる（Hinch and Butler, 2007, p. 5）。先住民と原住民の用語が普段の会話で厳密に区分されることはなく，ほぼ同義語として使用されている。同様に，先住民ツーリズム（aboriginal tourism）も原住民ツーリズム（indigenous tourism）も，ほぼ同じ意味で使われている。

## 参考文献

浅井昇，2004,『カナダ先住民の世界―インディアン・イヌイット・メティスを知る』彩流社。

石川涼子，2008,「カナダはどのような意味で多文化主義的なのか？―多文化主義のユニナショナル・モデルとマルチナショナル・モデルの検討」立命館大学生存学研究センター報告4，pp. 155-168。

国立国会図書館調査及び立法考査局，2012,『各国憲法集（4）カナダ憲法』。

クリフォード，ジェイムズ（太田好信ほか訳），2003,『文化の窮状―二十世紀の民族誌，文学，芸術』人文

書院。

佐藤直子, 2003,「ユネスコにおける“無形の文化財”保存についての取り組み」, 文化財研究所東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編,『“無形の文化財”の保護に関する国際比較』, 国際文化財保存修復研究会報告書, 第12回, 日本・アジア・ユネスコ編。

星野紘, 2007,『世界遺産時代の村の踊り―無形の文化財を伝え遺す』雄山閣。

守谷賢輔, 2012,「カナダ憲法上の『メティス(Metis)』の法的地位と権利：先住民の定義の予備的考察として」福岡大学法学論叢, 56(4), pp. 579-615。

山下晋司, 2007,「文化という資源」, 内堀基光編集『資源人類学01：資源と人間』弘文堂, pp. 47-74。

AANDC, 2002, *An Evolving Terminology Relating to Aboriginal Peoples in Canada*, Communications Branch, Indian and Northern Affairs Canada, PDF paper retrieved from the website of the AANDC.

――2013, *First Nations in Canada*, Aboriginal Affairs and Northern Development Canada. eBook retrieved from the website of the AANDC.

――2015, *Aboriginal peoples and communities, First Nations*, on the website of the AANDC, Date modified: 2015. 4. 7.

Adams, G.D. 1995, 'Cultural tourism: the arrival of the intelligent traveler', *Museum News*, December, pp. 32-35.

AtBC, 2005, *Aboriginal Cultural Tourism Blueprint Strategy*, November, Vancouver: Aboriginal Tourism Association of British Columbia. PDF paper retrieved from the website of AtBC.

ATMC, 2013, *Aboriginal Cultural Experiences: National Guidelines*, Aboriginal Tourism Marketing Circle. PDF paper retrieved from the website of Aboriginal Tourism Association of Canada (ATAC).

BC Stats, 2014, *Tourism Indicators 2012* (updated dada to 2013), prepared for destination BC by BC Stats, PDF paper retrieved from the website of BC Stats.

Benedict, Ruth F., 1959 (1934), *Patterns of Culture*, Boston: Houghton Mifflin Company.

Bennet, J. and Gordon, W., 2007, 'Social capital and the Indigenous tourism entrepreneur'. in J. Buultjens and D. Fuller (eds.), Striving for Sustainability: Case Studies in *Indigenous Tourism Research*, pp. 333-370, Lismore: Southern Cross University Press.

Blundell, V., 1989, 'The Tourist and the Native', in Cox, B. Chevalier, J. and Blundell, V. (eds.), *A Different Drummer: Readings in Anthropology with a Canadian Perspective*, Ottawa: The Anthropology Caucus and Carleton University Press, Carleton University, pp. 49-62.

――1993, 'Aboriginal empowerment and souvenir trade in Canada', *Annals of Tourism Research*, Vol. 20, Issue 1, pp. 64-87.

Butler, C.F. and Menzies, C.R., 2007, 'Traditional ecological knowledge and indigenous tourism', in R. Butler & T. Hinch (eds.), *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications*, Oxford: Butterworth-Heinemann (The edition published 2013 by Routledge), pp. 16-27.

Colton, J. and Harris, S., 2007, 'Indigenous ecotourism's role in community development: the case study of Lennox Island First Nation', in R. Butler & T. Hinch (eds.), *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications*, Oxford: Butterworth-Heinemann (The edition published 2013 by Routledge), pp. 220-233.

Csargo, L. 1988, *Indian Tourism Overview*, Ottawa: Policy Development Branch, Economic Development Sector, Department of Indian and Northern Affairs.

Duff, Wilson. 1997, *The Indian History of British Columbia: The Impact of the White Man* (3rd ed. with updated data to original print in 1964), Royal British Columbia Museum.

Duffer, Karen. 1983, 'Authenticity and the Contemporary Northwest Coast Indian Art Market', *BC Studies*, No. 57, Spring, pp. 99-111.

Edgerton, Robert B., 1999, 'Maladaptation: A Challenge to Relativism', in E.L. Gerroni-Long, ed., *Anthropological Theory in North America*, Westport, Connecticut: Bergin and Garvey.

Fayed H. and Fletcher, J., 2002, 'Globalization of economic activity: Issues for tourism', *Tourism Economics*, Vol. 8 (2), pp. 207-230.

Freidman, J., 1995, 'Global System, globalization and the parameters of modernity', in M. Featherstone, S. Lash and R. Robertson (eds.), *Global modernities*, London: Sage Publication, pp. 69-90.

Geertz, Clifford, 1984, 'Anti-Anti-Relativism', *American Anthropologist*, Vol. 86, No. 2, pp. 263-278.

Graburn, Nelson. 1976, 'Introduction: Arts of the Fourth World', in Graburn, Nelson (ed.), *Ethnic and Tourist Arts: Cultural Expressions from the Fourth World*, Berkeley: University of California Press. pp. 1-32.

GSTC, 2013, *Global Sustainable Tourism Criteria for Destination*, PDF paper retrieved from the website of Global Sustainable Tourism Council.

Guimond Éric and Robitaille Norbert, 2008, 'When Teenage Girls Have Children: Trends and Consequences', *Horizons Policy Research Initiative*, Vol. 10, No. 1, pp. 49-51.

Hinch, T., 1995, 'Aboriginal people in the tourism economy of Canada's Northwest Territories', in C.M. Hall and M.E. Johnston (eds.), *Polar Tourism: Tourism in the Arctic and Antarctic Regions*, New York: John Wiley and Sons, pp. 115-130.

——and Butler, R., 2007, 'Introduction: revisiting common ground', in R. Butler and T. Hinch (eds.), *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications*, Oxford: Butterworth-Heinemann (The edition published 2013 by Routledge), pp. 2-12.

Hinkson, M., 2003, 'Encounters with Aboriginal Sites in Metropolitan Sydney: A Broadening Horizon of Cultural Tourism?', *Journal of Sustainable Tourism*, Vol. 11 (4) : pp. 295-306.

Isajiw, Wsevolod W., 1974, 'Definition of Ethnicity', *Ethnicity*, 1, The Multicultural History Society of Ontario, Toronto, pp. 111-124.

Kymlicka, Will, 1998, *Finding Our Way: Rethinking Ethnocultural Relations in Canada*, Oxford University Press.

Langlois, Stephanie, and Turner Annie, 2014, *Aboriginal Languages and Selected Vitality Indicators in 2011*, Statistics Canada, PDF catalogue No. 89-655-X retrieved from the website of Statistics Canada.

Li, Y., 2000, 'Ethnic Tourism: A Canadian Experience', *Annals of Tourism Research*, Vol. 27 (1) : pp. 115-131.

Maitland, R. 2007, 'Cultural tourism and the development of new tourism areas in London', in G. Richards, ed., *Cultural Tourism: Global and Local Perspectives*, New York: Haworth Press, pp. 113-128.

McIntosh, A., 2004, 'Tourists' appreciation of Maori culture in New Zealand', *Tourism Management*, Vol. 25: pp. 1-15.

McKercher, B. and Du Cros, H. 2002, *Cultural Tourism: The Partnership between Tourism and Cultural Heritage Management*, New York: Haworth.

Ministry of Jobs, Tourism and Skills Training and Minister Responsible for Labour, 2014, *Annual Service Plan Report 2014/15*, PDF paper retrieved from the website of the Ministry of Jobs.

Nash, D. 1981, 'Tourism as an Anthropological Subject', *Current Anthropology*, Vol. 22, No. 5, pp. 461-481.

Nepal, S.K., 2004, 'Indigenous Ecotourism in Central British Columbia: The Potential for Building Capacity in the Tl'azt'en Nations Territories', *Journal of Ecotourism*, Vol. 3 (3) : pp. 173-194.

Norris, Mary Jane, 2011, 'Aboriginal Language in Urban Canada: A Decade in Review, 1996 to 2006', Faculty of Native Studies, University of Alberta, *Aboriginal Policy Studies*, Vol. 1, No. 2, pp. 4-67.

Notzke, C. 2006, *The Stranger, the Native and the Land: Perspectives on Indigenous Tourism. Canada*: Captus University Publications.

O'Donnell Vivian and Wallace Susan, 2011, *First Nations, Metis and Inuit Women*, Statistics Canada, July 2011, PDF catalogue No. 89-593-X retrieved from the website of Statistics Canada.

Parker, Barry, 1993, 'Developing aboriginal tourism—opportunities and threats', *Tourism Management*, Vol. 14, Iss. 5, October, pp. 400-404.

Piner, J.M. and Paradis, T.W., 2004, 'Beyond the Casino: Sustainable Tourism and Cultural Development on Native American Lands', *Tourism Geographies*, Vol. 6 (1) : pp. 80-98.

Richards, Greg (ed.), 1996, *Cultural Tourism in Europe*, Wallingford: CAB International.

——2001, 'The development of cultural tourism in Europe', in G. Richards (ed.), *Cultural Attractions and European Tourism*, Wallingford: CAB International, pp. 3-29.

——2007, 'The creative turn in regeneration: creative space, spectacles and tourism in cities', in M.K. Smith (ed.), *Tourism, Culture, and Regeneration*, Wallingford: CABI, pp. 12-24.

Robinson, M., 1999, 'Collaboration and Cultural Consent: Refocusing Sustainable Tourism', *Journal of Sustainable Tourism*, Vol. 7 (3&4): pp. 379-397.

——and Smith, M.K., 2006, 'Policics, Power and Play: The Shifting Contexts of Cultural Tourism', in M.K. Smith and M. Robinson (eds.), *Cultural Tourism in a Changing World: Pollitics, Participation and (Re) presentation*, Clevedon: Channel View Publication, pp. 1-17.

Ryan, C. 1991, *Recreational Tourism: a Social Science Perspective,* London: Routledge.

——and Huyton, J., 2000, 'Who is Interested in Aboriginal Tourism in the Northern Territory, Australia? A Cluster Analysis', *Journal of Sustainable Tourism*, Vol. 8 (1) : pp. 53-87.

——and Huyton, J., 2002, 'Tourists and Aboriginal People', *Annals of Tourism Research*, Vol. 29(3) : pp. 631-647.

Schmiechen, J. and Boyle, A. 2007, 'Aboriginal tourism research in Australia', in R. Butler and T. Hinch (eds.), *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications*, Oxford: Butterworth-Heinemann (The edition published 2013 by Routledge), pp. 59-70.

Selwyn, T. (ed.), 1996, *The Tourist Images: Myths and Myth Making in Tourism*, London: Wiley.

Shaw, S. 2007, 'Ethnoscapes as cultural attractions in Canadian "World Cities"', in Smith, M.K. (ed.), *Tourism, Culture and Regeneration,* Wallingford: CABI, pp. 49-58.

Sisco, A. and Nelson, R. 2008. *Closing the Gap: Toward Capturing the Value of Aboriginal Cultural Industries*, Prepared for Aboriginal Affairs Branch of Heritage Canada by Conference Board of Canada.

Smith, M.K., 2009, *Issues in Cultural Tourism Studies* (Second Edition), London and New York: Routledge.

Statistics Canada, 2006, *Aboriginal Peoples in Canada in 2006: Inuit, Metis and First Nations*, Census. Statistics Canada, PDF catalogue No. 97-558-XIE retrieved from the website of Statistics Canada.

——2011a, *Aboriginal Peoples in Canada: First Nations People, Metis, and Inuit*, National Household Survey, Statistics Canada, PDF catalogue No. 99-011-X2011001 retrieved from the website of Statistics Canada.

——2011b, *The educational attainment of Aboriginal peoples in Canada*, National Household Survey, Statistics Canada, PDF catalogue No. 99-012-X2011003 retrieved from the website of Statistics Canada.

——2011c, *Aboriginal languages in Canada, 2011 Census of Population*. Statistics Canada, PDF catalogue No. 98-314-X2011003 retrieved from the website of Statistics Canada.

Steward, Julian H., 1948, 'Comments on the Statement of Human Rights', *American Anthropologist*, Vol. 50, No. 2, pp. 351-352.

The BC Jobs Plan, 2012, *Gaining the Edge: A Five-year Strategy for Tourism in British Columbia 2012-2016*, Vancouver: Ministry of Jobs, Tourism and Innovation, BC. PDF material retrieved from the website of BC Jobs Plan.

Trudeau, Pierre Elliot, 1971, 'Canadian Culture: Announcement of Implementation of Policy of Multiculturalism Within Bilingual Framework', in *Canada, House of Common Debate: Official Report*. 28th Parliament, 3rd Session, 20 Elizabeth Ⅱ, volume Ⅷ: Comprising the Period from the Thirteenth Day of September, 1971, to the Nineteenth Day of October, 1971, inclusive (Published under the Authority of the Speaker of the House of Commons by Queen's Printer for Canada, 1971): 8545.

UNDP, 2009, *Supporting Capacity Development: The UNDP Approach*, New York: United Nations Development Programme, Bureau for Development Policy. PDF brochure retrieved from the website of UNDP.

UNIES, 1995, *First Host Service Training Manual*, First Draft edition, Vancouver: Urban Native Indian Education Society, Human Resources Development Canada, BC Ministry of Tourism, Small business and Culture.

UNWTO, 1995, *Report of the Secretary General of the General Programme of the Work for the Period 1984-1985*, Madrid: World Tourism Organization.

Usalcas, Jeannine. 2010, *Aboriginal People and the Labour Market: Estimates from the Labour Force Survey, 2008-2010*, The Aboriginal Labour force analysis Series, Statistics Canada, Labour Statistics Division, PDF catalogue No. 71-588-X retrieved from the website of Statistics Canada.

William, Reymond, 1983, *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*, London: Fontana.

Williams, P.W. and Stewart J.K., 1997, 'Canadian Aboriginal Tourism Development: Assessing latent demand from France', *The Journal of Tourism Studies*, Vol. 8, No. 1, pp. 25-41.

——and O'Neil B., 2007, 'Building a triangulated research foundation for indigenous tourism in BC, Canada', in R. Bulter and T. Hinch (eds.), *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications*, Oxford: Butterworth-Heinemann (The edition published 2013 by Routledge), pp. 40-57.

Wood, Robert, E. 1997, 'Tourism and the State: Ethnic Options and Constructions of Otherness', in Michel Picard and E. Wood (eds.), *Tourism Ethnicity, and the State in Asian and Pacific Societies*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1997, pp. 1-34.